

学生が伸びる学び方

## 大学選択

新たな視点



### 今号の視点

# 大学での学びへの意欲とスキルを 育成する初年次教育〈東日本編〉

専門教育を学ぶための基礎となる「初年次教育」は、多くの大学が取り入れるようになり、一般的になりつつある。今号では、より意欲的にカリキュラムを工夫し、学生のスキル養成や専門教育への土台づくりを行う大学の中から、東日本にある2校を紹介する。

## 課題発見・解決が出来る 土台を初年次につくる

横浜市立大  
「共通教養」

### ◎課題意識と狙い

横浜市立大は、国際総合科学部（\*1）と医学部の2学部からなる公立大だ。同大では2年次から専門分野の教育が始まる（\*2）ため、1年次（初年次）の教養教育は、専門分野での学びの土台となる「大学での学び方」を身に付ける場として位置付けられている。

共通教養長の小屋良祐教授は、

「かつての教養科目は、『広く、浅く、満遍なく知識を学ぶ』傾向が強くなりました。しかし、本来、初年次教育は、専門分野での学びを深めるための基礎を身に付けることを目的としています。そこで、本学の考える教養とは『課題を発見し、身に付けた知識を使って問題解決をする力』であることを学内で共通理解を図っています。これは、どの専門分野を学ぶ際にも必要な力であり、また、社会で求められている力だと捉えています」と語る。

専門分野での学びを深めるに当たり、あらかじめ「課題発見・課

題解決」の技法と、主体的に学ぶ姿勢を身に付ける。全ての学生に必要なこの学びを、同大では国際総合科学部と医学部の枠を超えて1年生全員が履修する「共通教養」というカリキュラムにした。

### ◎取り組み内容

「共通教養」は、「問題提起」「技法の修得」「専門との連携」の3つの科目群で構成されている（図1）。「問題提起」は課題発見の視点を学ぶ科目群で、テーマに対して学問横断的にアプローチする授業が並ぶ。「技法の修得」は、問題を解決するための手法を身に付ける科目

群で、語学や情報技術などの科目が含まれる。「専門との連携」は、2年次以降の専門分野の基礎を学ぶための科目群だ。

この中の「技法の修得」の科目群に、「共通教養」の柱ともいえる必修科目「教養ゼミ」（前期）と「基礎ゼミ」（後期）がある。

「教養ゼミ」では、1年生全員を学部や入試方式が偏らないように1クラス約30人の30クラスに編成する。担当教員は1クラス2人で、1回の授業は90分×2コマの180分。担当教員によって進め方は多少異なるが、グループワー

\*1 国際総合科学部は、国際教養学系・国際都市学系・経営科学系・理学系から構成  
\*2 ただし、医学部は一部1年次から

図1 横浜市立大「共通教養」の3つの科目群

	科目	内容
問題提起	総合講義	課題発見を目的に、テーマに対して学問横断的にアプローチする科目群。「国際関係論」「横浜と産業」「医療と社会」などがある
	多文化交流ゼミ	英語で考えを表現することを学ぶゼミ (Practical English 合格者が対象)
	実践科目	キャリア形成実習や健康スポーツ実習など、教室外の活動を通して学ぶ
技法の修得	ゼミ	教養ゼミ*、基礎ゼミ*
	語学(英語および英語以外の外国語)	大学における知的活動を英語によって行える程度のコミュニケーション能力を身に付けることを目的にした「Practical English」* (国際総合科学部では TOEFL-ITP500 点相当以上が3年次進級の必須要件) などがある
	情報コミュニケーション科目	情報処理の知識と技術を学ぶ。「情報コミュニケーション入門」*「プログラミング基礎」「データ分析基礎」などがある
専門との連携	基礎科学講義	専門教養・専門教育の基礎となる入門的科目(「政治学入門」「心理学入門」「微分と積分」「生命の機能」など)、学問分野によらない課題探究科目などがある

\*必修科目

\*学校資料を基に編集部で作成

ク、個人の研究発表、レポートなど、学生が主体的に参加する形式が中心だ。これらの活動を通して、自ら考える力、すなわち課題発見・解決と知的生産の基礎的な技法の修得を目指す。

「教養ゼミ」を担当する平松尚子<sup>なほこ</sup>准教授は授業の流れについて、「私のクラスでは、5〜6人に分かれてグループワークを行います。メンバーそれぞれが関心を持つテーマを

出し合い議論した上で、テーマを1つに絞り、グループで研究を進め、発表をします。最初のグループ発表は、あえて学生の思うようにさせて、振り返りを丁寧に行うようにしています。続いて、図書館での資料の探し方、レポート作成の手法、出典を示す重要性など、学ぶためのスキルを修得した後、8週にわたって個人発表を行い、発表内容を基に6000〜8000字のレポートを作成します」と語る。

個人発表は学生個々の関心に基づきテーマ研究を進め、発表時間は1人当たり45分。25分程度の発表後、他の学生からの質問や、教員による講評などを受ける。前半のグループワークでの反省や授業で学んだスキルを踏まえた準備が必要だ。

「教員、友人、資料など、あらゆるリソースを利用しながら自分の考えを深める経験を、この授業を通して積んでほしいのです」(平松准教授)

国際総合科学部人間科学コース3年生の木村薫<sup>かほる</sup>さんは、「先生からの一方的な講義形式ではなく、自分たちで調べて発表する形式の授業で、やりがいがありました」と振り返る。

後期に開講される「基礎ゼミ」は、教員がそれぞれの専門分野を入門的に教えるゼミだ。

「『基礎ゼミ』は、実際の研究に触れることで学生の学問への興味をかきたてることを目的としています。教員が自分の専門分野に則した内容を教え、専門のゼミに入る前に『研究する』ことの一端を感じてもらおう授業です」(小屋教授)

◎成果と課題

「共通教養」の成果について、小屋教授は「従来は進級後の専門ゼミでこうした学び方を教えていましたが、1年次で身に付けて進級するため、専門教育の授業の質が高まっているのではないかと考えています」と語る。平松准教授は、「問いを認識し、信頼できる資料を集め、批判的に分析するという、研究の面白さを学生が知ることにもつながっているようです」と話す。

課題は、教員間の手法の平準化と

いった内容面での改善や、学生に対して「共通教養」の意義をより深く理解させるための伝え方の工夫などだ。「共通教養」を始めて以降、毎年改良を加えてきたが、引き続き工夫改善が検討されている。

### 全学部の学生の「大学での学びの基礎」を涵養する

武蔵野大  
武蔵野BASIS

#### ◎課題意識と狙い

8つの学部を擁する武蔵野大では、文理を問わず、全ての1年生が共に学び、「武蔵野大の学生」としてのアイデンティティと、大学で学ぶ力の形成を目的に、全学共通基礎課程として「武蔵野BASIS」という独自のカリキュラムを組む。教養教育部の部長を務める久富健<sup>ひさとみ</sup>教授は、次のように説明する。

「本学では2000年頃からキャリア教育の改善を重ねてきました。この改善を通じて出てきた『4年間を通して学生をどう育てるか』という課題意識を基に、キャリア教育だけでなく大学教育自体を改善しようと、10年度から『武蔵野BASIS

「S」をスタートさせました。大学の教育の課題である教養教育と専門教育の隔たりを解消し、卒業後にも生かせる力を確実に涵養したいという意図を込めたカリキュラムです。学生の関心に任せた従来の教養教育ではなく、1年生で身に付けるべき力をしっかりと修得できるようなカリキュラムとしています」

◎ 取り組み内容

「武蔵野BASIS」の科目群は、建学の精神を基盤とした倫理観や健康体育を学ぶ「心とからだ」、英語と初修外国語を学ぶ「外国語」、コンピュータ関連科目、日本語リテラシー、社会に出てからも必要となる基礎学力を学ぶ「学問を学ぶための基礎」、教養とアカデミックスキルを身に付ける「自己理解・他者理解」で構成される(図2)。

最も特徴的な科目は、「自己理解・他者理解」に位置付けられている「基礎セルフディベロップメント」(通年科目・8単位)だ。1年生全員を1クラス約65人の28クラスに編成し、哲学、現代学、数理学、世界文学、社会学、地球学、歴史学の7分野を学ぶ。各分野を専門とする教員が交

替で3週ずつ担当し、1年間で「知の7つのインパクトを与える」というものだ。1回の授業は2コマ連続で行う。1コマ目は座学の講義、続く2コマ目は1コマ目で学んだ内容を基にグループワークなどに取り組み双方向型の授業となり、大学院生のTA(\*3)もサポートに入る。

「例えば、哲学の授業では、デカルトやニーチェの作品を読み、学生に議論させます。『なぜ理系学部に進学したのに文系の内容を学ぶのか』という疑問を持つ学生もいますが、全ての学生に本当の意味での教養に出合っしてほしい、知的刺激を受けてほしいという思いから、こうした授業をしています」(久富教授)

知識の伝授だけでなく、グループワークで「考え、議論し、伝える」訓練を行うことも重視する。コミュニケーション力、チームワーク形成力を養った学生たちの1年間の授業の集大成が、年度末の「成果発表」だ。7分野の中から自由に研究テーマを設定し、プレゼンテーション用ソフトを用いて発表を行う。

◎ 成果と課題

「基礎セルフディベロップメン

ト」の成果について、久富教授は次のように話す。

「他学部の学生とさまざまなテーマでグループ学習をしながら1年間学ぶことで、仲間ができ、学生としてのアイデンティティーも育まれていきます。学びの基礎も身に付いていくため、2年次以降も、学生は学問に熱心に取り組むようになり、ゼミでは議論やプレゼンテーションが円滑にされるようになりました」

政治経済学部政治経済学科3年の保谷麻衣さんは、「学生同士で意見を言い合う環境が新鮮でした。他学部の人と話す機会を通じて考え方の違いを知り、互いにアドバイスし合ったことで多くの気づきがありました。これが学習への積極性につながっています」と振り返る。3年生になり、発言の機会のある授業が増えた今、グループで学びを深める経験が役立っているという。

「武蔵野BASIS」の科目はほとんどが必修で、進級基準科目(\*4)も設定されているためか、学生の出席率も高い。このカリキュラム

図2 武蔵野大「武蔵野BASIS」の科目

分野	科目と内容
心とからだ	建学/建学の精神を基盤とした倫理観や慈悲の心を学ぶ 健康体育/身体を動かす体育と身体行動についての学びの理解と実践
外国語	外国語*/英語 外国語*/中国語、韓国語、フランス語、スペイン語、ドイツ語
学問を学ぶための基礎	コンピュータ*/調査・研究などでコンピュータを活用する力の育成 日本語リテラシー*/論理性・表現力の養成 武蔵野BASIS基礎/社会に出て必要となる社会科学と自然科学の一般的な基礎力を育む
自己理解・他者理解	基礎セルフディベロップメント*/「哲学」「数理学」などの7つの分野で基礎教養を学ぶ キャリア開発・自己の探求/自己や他者を深く理解する力の育成 キャリア開発・キャリアデザイン/人生を豊かに生きていく力の育成

「武蔵野BASIS」は4分野10科目で構成される。\*の進級基準科目は単単位を取得しないと2年生に進級できない。1年生は上記10科目に加え、各学部の科目を履修する \*学校資料を基に編集部で作成

を通して友だちや居場所が出来ることもあり、大学への帰属意識が高まっているという。

12年度で3年目を迎える「武蔵野BASIS」。普段からFD活動を活発にして教育内容のブラッシュアップを行っていることに加え、13年度には学生の成長度合いや満足度などのデータを確認し、改善を加えていく予定だ。キャリア教育をはじめ、教育内容の大きな変更を試みた科目もあり、発展途上のカリキュラムといえる。

\*3 Teaching Assistant の略。授業の運営の支援や補佐をする学生のこと

\*4 単位を取得しないと2年生に進級できない科目

専門分野を学ぶ手法と  
姿勢を学んだ



横浜市立大国際総合科学部  
人間科学コース3年  
藤田良也  
(神奈川県立瀬谷高校卒業)

高校時代から世界の文化や人に興味があり、大学では言語や異文化を学び、英語教師になることを目標に入学しました。「教養ゼミ」のグループワークでは、「海外留学」をテーマにしました。私は語学や文化に関心がありましたが、医学部の学生は医学留学について調べてくるなど、異なる視点での意見による刺激を受けました。グループワークでの発表で、担当の小屋先生から、発表資料の細かい誤りや参考資料の扱い方について厳しく指導され、悔しい思いをしました。個人発表では、グループワークで指摘された点に留意して臨みました。大学での学び方や図書館の使い方、自分で調べる主体的な勉強法など、専門分野を学ぶ上で大切なことを学んだのだと思います。これがなければ、2年生になって本格的な専門分野での学びに対応できなかったでしょう。「専門ゼミ」では、文化を対象に人間科学や心理学と教育のつながりを学ぼうと思い、社会学の滝田祥子先生のゼミを選択。教育のさまざまな形について学びを深めたいと考えています。

物事を関連付けて考える  
姿勢が身に付いた



武蔵野文学部  
日本語日本文学科3年  
後藤翔美  
(東京都立墨田川高校卒業)

高校生の頃は社会学に興味がありましたが、他学部聴講も含め、いろいろな学べそうな武蔵野大に進学しました。「基礎セルフディベロップメント」では、難しいテーマでも先生が分かりやすく解説してくれました。例えば、哲学では「あなたはデカルト派とパスカル派のどっち？」など、普段は意識しないようなテーマでも、興味を持って議論できました。話を聞くだけでなく議論することで、メンバーの考え方の違いや視点の違いも共有でき、興味を深めることが出来ました。短時間で深い議論をする練習が出来たと思います。こうした学びは、今、物事を関連付けて考える土台となっています。日本語教育だからといって、日本語だけを教えるのではなく、歴史や社会などの背景も含めて伝える必要があるという視点を持てたのも、この授業があったからです。討論のグループは授業ごとに変わるので、今でも仲良くしている人もいます。たぐさんの人と知り合いになれたのも収穫でした。

進路指導に生かす

初年次教育での

必修科目の比率に注目

今回は、「大学4年間を通してどのような力を付けるべきか」「専門性を深めるためには初年次に何をすべきか」という課題意識を持ち、カリキュラム改善に意欲的に取り組む大学を取り上げた。この2校では、初年次教育における必修科目の比率が高い。学生の科目選択の裁量は狭まるものの、カリキュラム自体が「大学で何を身に付けるべきか」という問いに答えているともいえる。

学部での専門教育の内容に比べ、注目されることが少ない初年次教育だが、「4年間の教育」に対する大学の姿勢が判断できる部分だといえる。大学選びの際の1つの重要な指標になるだろう。

取材・編集協力：山内太地

特徴的な初年次教育実施大学 東日本編

初年次教育に少人数のゼミ形式を取り入れる大学・学部を紹介

●一橋大商学部  
導入ゼミナール

4年間を通してのゼミナール教育を重視。1年次の「導入ゼミ」では、大学が必要となる「読む・書く・考える」という基礎的なリテラシーを育む。2年次の「前期ゼミ」では、英語の文献から専門知識を学ぶために必要な力を養う。

●首都大東京  
基礎ゼミナール

1年生の必修科目。定員は24人。テーマ別に約70クラスが開講される。授業は調査レポート作成→発表→討論の流れで、課題解決に必要なスキルを体験的に習得する。

●聖心女子大  
基礎課程

1年次は「基礎課程」とし、全員が少人数ゼミに所属。アカデミックアドバイザーを兼ねる担任教員の指導を受ける。「1年次センター」というサポート室があり、相談も可能。2年次進級時に学科専攻を選ぶ。

●明星大  
自立と体験1・2

「自立と体験1」は50人の教員が約30人×67クラスを担当。対話を通じて、各自の理想や目的を見つめていく。「自立と体験2」は、フィールドワークなどの実践型で、自身の興味や可能性を探る。